

家族問題の象徴としての不登校

木附千晶¹・青木智子²・小川未佳³・斎藤 学³

¹文京学院大学 保健医療技術学部 作業療法学科

²啓明大学校 自然科学大学公衆衛生学科

³IFF CIAP 相談室

要旨

本事例は、不登校に代表される長男の問題行動と、その長男に対する夫の暴力を主な主訴とし、個別面接として始められたものである。面接が進行するにつれ、長男の不登校やCIと夫の不登校経験、原家族との問題が明らかにされ、CI・夫・長男への各個別面接と、これに並行した月1回の家族面接が設定された。夫は機能不全家庭に育ち、妻もまた支配的な母親のもとで“永遠の娘”でいるべく、4人の子どもの成しながら入籍を拒み、事実婚を継続している。面接を通して夫婦になりきれていない夫との関係、母親との心的密着が長男の不登校などの問題行動に関係することを自覚していく。次第に親としての役割の自覚が芽生え、“業務”として関わっていた子育てにも、親らしい養育態度、感情交流が見られるようになった。こうしたCIの子どもの関係の変化が、子どもの態度に影響を与え、長男は登校を始めるようになった。ここでは、CIの面接の経緯、CIの変容を中心に考察を行う。

キーワード

母娘関係、自立、暴力、不登校

I. はじめに

クライアント34歳(以下、CIと記述)は、社会的に承認された夫婦となることを先延ばしにし、事実婚のまま4人の母親となった。小学生時代のフリースクール仲間であったCIとその夫は、共に不登校経験者であり、不登校の長男(以下、IP)に登校刺激を与えることもない。むしろ、公的教育に批判的感情を持ち、積極的にIPをフリースクールに通学させている。CIは、IPに年齢にそぐわない行動がみられること、また、IPのこうした行動に対して夫が暴力的になることを訴え、相談に訪れた。

本事例は、3週間に1回50分の個別面接として開始されたが、後に不登校問題に象徴されるクライアント自身の実母との葛藤、夫婦関係の問題が明らかにされた。このため、CI・夫・identities patient(以下 IPと記述 注:問

題を持つ子どもを意味する)3者に対する個別面接、並行して月1回の精神科医で同相談室顧問(以下、SVと記述)による家族全員が参加する家族面接が提案され、CIの個別面接開始から約1年後の20X1年3月より実施された。これらの枠組みの変更はCIとの面接から、①不登校という「症状」が示す家族の問題であること、②「症状」や主訴をCI個人のみの問題としてではなく、世代間連鎖に由来するものであることと考え、家族全体を治療対象とすべき、と見立てたことが理由である。その結果、CIは次男(第4子)の出産とIPの登校開始を契機に、養育態度や公教育についての認識変容を遂げた。

子どもをめぐる心理治療を考えるとき、渡辺(2005)は、親子関係の葛藤の再燃、親自身の生い立ちをめぐる葛藤のパターン、祖父母の世代からの未解決の葛藤の世代間伝達などについての精神力動的な理解を含む、幅広い視点が必

要であるとしている。この指摘からも、3者への個別面接と家族を対象とした家族面接は有益であったといえよう。

本論文は、子どもの問題行動との関わり方を中心に、CIの変容に焦点を当て考察するものであり、主にCIの個別面接の経緯を主に検討し、家族面接の流れは参考に留めて言及する。なお、本事例は本人の同意、相談室の倫理審査承認を得ているが、本人特定を避けるために一部内容に手を加えたことを付記する。

II. クライアントとその家族

1) クライアント、および主訴

クライアント (CI) : 34歳, 女性, 大学教員. 4人の子どもの母親. セラピストAが(以下, Th.と記述)20X0年5月より3週間に1回50分の個別面接を実施した(家族面接開始後は1~2週間に1回となる).

主訴: 長男(IP)の不登校と年齢に不釣り合いな行動. 夫から長男を含む子どもへの暴力.

2) 成育歴

父は大企業に勤務し不在がちな父と, 自立した女性に憧れつつ専業主婦となり, 公教育に否定的な母の元で, 2歳年下の妹, 5歳下の弟と共に育つ. 妹弟も共に小中学校時代に不登校を経験. 幼少期は父の転勤に伴い各地を転々とし, 小学校入学以前から首都圏に暮らす. 小4時, 母の入院を機に学校を欠席しがちになり, 小5の2学期から完全

に不登校となる. 小6からフリースクールに通い, 現在の夫と知り合う.

夫(契約社員, 33歳)も中学時から不登校であり, 父親が愛人と別宅で生活する機能不全家庭に育った. 夫が中3時に両親は離婚. 後, 母親の再婚に伴い, 夫は親戚宅で生活してきた. CIによると「夫は生き立ちが複雑で詳しいことは聞いていない. 辛い経験のせいか話したくない」とのこと.

CIは高校に入学するが, 直後に父の仕事のため家族で海外転居. 現地のインターナショナルスクールに通学. この「学校に行けた」経験がCIの後の自信に繋がった. 海外転居中, 夫とは文通で親交を深め, 大学受験時にひとり帰国した時から交際が始まった. 予備校を経て, 看護大学に進学. 大学2年で夫の子どもを中絶したことで, 両親から交際を禁じられ, CIが夫の部屋に転がり込むかたちで同棲を始める.

大学卒業後は, 看護師として1年の病院勤務を経験し, 出産に伴い夫と事実婚. 数年前までCIの実家の2世帯住宅で生活していたが, 両親と夫の関係の悪化から家を出る. 現在は, 4人(家族面接開始後に出産した1児を含む)の子どもと夫との6人で, 実家から徒歩数分のところにある借家の一軒家で生活.

3) 家族構成 (図1参照)

夫: 33歳, 専門学校を経て, 一時, 父の経営する会社を受け継ぐが, 経営不振で会社を整理. その後, 契約社員

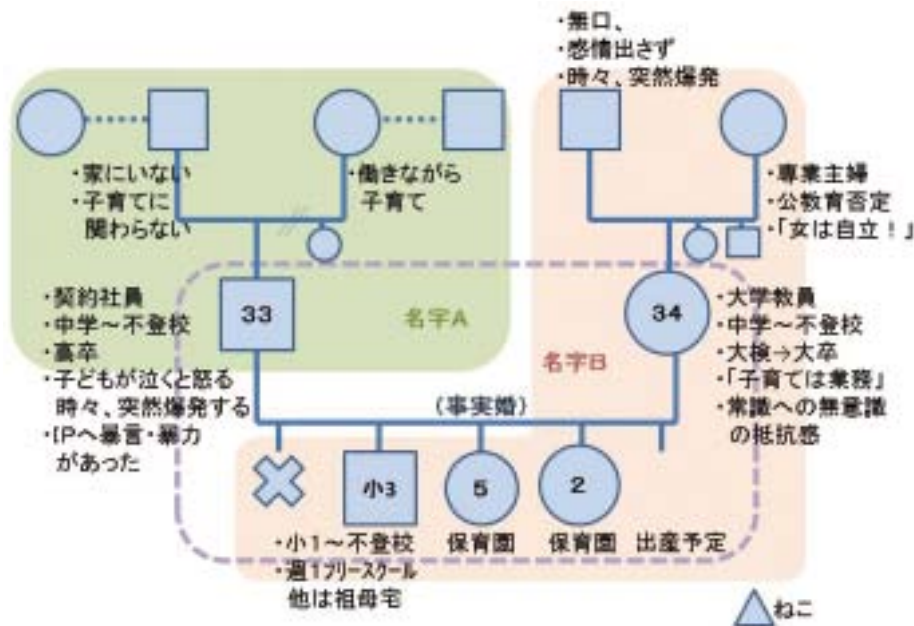


図1

として再就職した。子どもが騒ぐと怒り出すなど暴力的な側面がある。中3時に両親は離婚。父はそれ以前から別の女性と同居していた。不登校の妹は高校卒業資格試験を経て、海外の大学へ進学。海外で結婚し現地在住。Cl.の個別面接開始から1ヶ月後の20X0年6月より、月1回50分のセッションとして個別面接を開始した。

長男（IP）：8歳、小学校3年生。小学校入学以来不登校でフリースクールに通学していたが、3年生2学期の終業式直前よりときどき登校するようになる。フリースクールにも、学校にも行かない日は近所にあるCl.実家で過ごすことが多い。20X0年7月より週1回の個別面接が実施された。

長女：5歳。保育園児。2011年春より小学校入学。

次女：2歳。保育園児。

次男：出産予定。

4) 見立て

Cl.は、母親に反感を持ち、母親の言動を否定的にとらえながらも、入籍を考えると母親の顔が思い出されて婚姻届を提出できなかった。このため、事実婚という形を取るなど、母親から独立できずにいる。IPは多くの場合、昼間はCl.実家に身を寄せているが、このことがCl.夫婦をいらだたせている。しかしその一方で、IPのこうした行動が、Cl.夫婦とCl.の両親、それぞれの夫婦同士の結束を固め、お互いに関係を持たざるを得ない状態を生じさせている。つまり、結果としてIPの問題行動は不安定なCl.夫婦、Cl.夫婦とその両親（主にはCl.とCl.の母親）の関係をつなぎ止める役割を果たしていると考えられる。

5) 治療方針

全てを先延ばしにし、中途半端にすることで、問題との直面化を避け、精神的な葛藤を意図的に自覚しないようにしているCl.の行動、思考の修正を図る。そのことでCl.が夫を社会的にも心理的にもパートナーとして受け入れ、安定した夫婦となれるようにする。同時にIPが登校できるよう促す。

具体的には、以下①～④を行うこととした。

- ① Cl.夫婦が内縁関係とはいえ、夫婦として理想的な関係をつくるために歴史を積み上げてきており、ふたりの意志と力で成し遂げてきたことを自覚できるよう励まし、称賛する。
- ② Cl.夫婦が、問題を抱えながらも、自分たちは素晴らしい夫婦・家族をつくってきたと認識できるよう、夫婦・家族の出来事を年代史として作成させる。このことで

家族の歴史をより深く意識させ、事実婚という不安定な夫婦関係がIPに与えた影響についても自覚を促すと同時に、“家族”という枠組みを意識できるようにする。

- ③ Cl.夫婦が安定した家族となるまでの間、IPにとって“頼れるおとな”（担当セラピスト（以下 Th.と記述））を用意し、独立した被治療者として個別面接を行う。
- ④ 各Th.のSVである精神科医による月1回の家族面接を実施する。これは家族面接の内容が各個別面接に活用されること、家族面接が世代間連鎖に由来する家族問題を明らかにすること、個別面接の効果を上げることを目的とする。

ゴール：安定した夫婦関係の構築。その結果IPの役割が軽減され、登校が促されること。

Ⅲ. Cl.面接の経過

1) I期：不安定な夫婦関係の理解（#1～19）20X0年3月～20X1年4月

注）なお面接プロセスは、Cl.の変容の段階に応じて期間を分類している。文中にある#は、面接回を示す。

数年前まで2世帯住宅で私の両親と生活していた。現在は実家から徒歩圏にある借家で夫と3人の子ども（8歳、5歳、2歳）と暮らしている。長男（IP）は保育園のときは嫌がらずに通園していたが、小学校入学後まもなく不登校になった。今は近隣のフリースクールに往復3時間の電車通学させている。毎朝、保育園児である長女、次女、夫と家族全員で家を出るが、IPはそのまま実家の母の家に行くことが多い。最近はフリースクールも休みがちなのが気になる。夫は、「IPが怒った直後に同じことを繰り返したり、場にそぐわない行動をしたり、妹や飼猫に攻撃的などの問題行動だけを叱っている」という。だが、それは暴力であるように思える（#1）。大学時代に妊娠し、中絶したことを両親に知られ、交際を禁じられたために夫と同棲を始めた。中絶の経験から「罪滅ぼし」に産科の看護師になることを決めた。8年の病院勤務後、大学教員となり現在に至る（#2～5）。

IP出産時、出生届と一緒に婚姻届けを提出するつもりだったが、直前に母親の顔が浮かび、入籍を見送った。以後、現在に至るまで事実婚を続けている。専業主婦の母親（65歳）は、「女性は自立すべき」という信念の持ち主。その母親の影響なのか私も結婚して夫の姓になることに抵抗があった。大企業の会社員だった父は不在がちで、休日は部屋にこもって寝ているような人。感情を表情に出さず、内に溜めるタイプで、急に激昂し、口を利かなくなることも

あった。IPが母親のところにすることが多く、そのことで夫とのケンカが絶えない。中絶以来、夫は私の両親と折り合いが悪く、同居中も私が板ばさみになることが多かった。その関係の悪さから別居を決めた（#6～14）。

私も小4時から不登校だった。母親は登校を促すどころか、公的教育に否定であったため、不登校をとがめられた記憶がない。IPも学校に行きたくないのなら、フリースクールで必要なことを身に付ければいいと思う。夫も同様の考え。子どもをうまく叱ることが出来ない。私はつい声を荒げてしまうし、夫は手を挙げたりもする。子どもというのは思い通りにしたくてもならない存在。私は子どもの甘えをなかなか受け入れられない。私の母親もそうだった。子どもとの会話は禁止ごとばかりになってしまう（#15～19）。

Th.の印象：Cl.にとって、子育ては“試練”で、子どもは思い通りにならない面倒な存在と捉えている様子。自身も不登校について登校刺激などを受けた経験がなく、IPの不登校に関しても問題意識を強く抱いていない。

<家族面接の内容及び個別面接へのSVからの指導>

SVより「妻および夫の原家族の問題や不安定な婚姻関係が子どもに影響を与えている可能性が大きい」として家族面接の導入が指示される。1回目の家族面接では、IPの不登校、IPが弟妹や飼い猫、同世代の友達とうまく関われないこと、Cl.が入籍を拒んだ経緯などの概要が、Cl.と夫から語られた。SVからは、Cl.と夫それぞれに「不登校のメリット・デメリットを記述せよ」という課題が出された。各個別面接では、不登校に対する考えや、気持ちを整理し、親としての態度の振り返りができる機会にするよう助言された。

2) II期：子どもとの関係の洞察（#20～25）20X1年5月～7月

不登校のメリットとデメリットを記述する課題は難しく、かなり時間がかかった。私は、「IPは、不登校によってしなければならぬことをしなくてすんでいる」と考えた。しかし、夫は「現実生活に即した不登校のメリット・デメリットだけを話すのはずい」と言った。夫は私たち夫婦とIPの問題としての不登校ではなく、社会一般的に「不登校とはどういうものか」を記述していた。同じ不登校の話をしているのに、夫婦の認識の違いに驚いた。不登校について考えたことで、夫婦共に画一化された“学校的なもの”への嫌悪感があると再認識した（#20）。

子どもと意識的に会話するように心掛けてみたが、いつでも、いつの間にか立ち消えになっていることに気づいた。

子や飼い猫を可愛さのあまり思わず撫でることもなかった。子や猫の世話を“業務”としてこなしてきたのではない。夫も家族を「誰がいれば、何ができる」というマンパワーとしてしか捉えていない。夫は遊園地などに積極的に子どもを連れて行くので、端から見れば、積極的に育児に取り組むお父さんに見えるだろうが、特別なイベントするくらいしか子どもとの関わり方が分からないのかもしれない。日常生活の中で、子どもを喜ばせたり、楽しませたり、情緒的な交流を図ることはない。幼少期の食事時間が辛かった経験から家族全員で食事をするに夫はこだわりを持っているが、子どもたちが楽しく食事をする雰囲気ではない。夫の独演会をみんなが拝聴している感じ（#21）。

小学校の頃、常に他の子と違うことをして目立っていた。母親は不在がちな父親の権威を利用して子どもをコントロールしていた。不登校の原因は公教育にある。家族には何も問題はないと母親から言われ、自分もそれを信じてきた。カウンセリングを続けることで、その信念が崩れるのが怖いかもしれない（#22）。

中絶を知った父親が激怒し、夫を罵倒したことがあった。私はいたたまれなくなり、その場を離れて公園のベンチでぼうっと座っていた。今思うと、中絶せざるを得ない状況をつくった夫への怒りが、私にもあったからこそ、父親との間に入って夫を弁護できなかった気がする。中絶後、私が夫の家に転がり込むかたちで同居を始めたが、中絶したことで数年間、夫を責めていた。「Cl.が父親に乗り移り、夫を罵倒したのかもしれないね」という家族面接でのSVの言葉で、「IPの登校を止めているのは私かもしれない」との思いがよぎった。かつて父親に乗り移って怒りを表現したように、今はIPに乗り移って、IPを学校に行かせないことで私自身が学校や公教育と距離を置いているのかも知れない（#23）。IPは最近一度だけ、登校をほめかけたが、その後は全く話題にしない。Cl.と夫の間でも話をしていない。新学期が目前なので、夫と相談すべきと考えている（#24）。

夫は「これまでは自分が暴力や怒りを抑えていたのでなく、子どもが静かだったから怒らなくてすんだだけ」と言うが、私にはそう見えない。夫は、思いを言語化できない人間は社会で生き残れないと考えているようで、明瞭な説明に執着し、子どもにも強要している。子どもの気持ちを察したり、親の側が子どもの気持ちを引き出すことに抵抗があるようだ。子どもへの暴力を止めたときなどに、夫が私に暴力をふるうこともある。妊娠中の最近も暴力があって、IPが「ママは妊婦なのにね」と慰めてくれた（#25）。

Th.の印象：Cl.には「人間は思い通りに他者が動か

ないと怒りだすもの」という考えがあり、夫が突然、激昂したり、子どもに対して年齢にそぐわない期待（合理的に説明するなど）を爆発させることに疑問を感じていない。夫の暴力がCIに向けられることもあると初めて語ったが、重要なこととは認識しておらず、危機感もない。暴力の程度を尋ねても、「結構な痛さだったが、どこを叩かれたのかわからない。蹴られてはいないから身体の上の方だったように思う」と答えるのみだった。

<家族面接の内容及び個別面接へのSVからの指導>

家族面接では、中絶から同居（事実婚）に至るまでの経緯から、SVが「お互いの強い意志を非常に感じる結婚。この結婚、そして夫婦関係を誇りに思っている」と繰り返し強調した。また、IPは不安定な夫婦関係の“かすがい”でもあり、そのために不登校という問題行動が生じている可能性が高いことも指摘した。

さらに、①中絶から同居に至る一連の出来事を家族の創生期ととらえることを提案し、妻が中絶した日と、妻が夫と同居をはじめた日を明確にして、夫婦になったことをきちんとふたりの歴史に刻む。このことで戸籍という縛りのない夫婦関係について自覚的にさせる。②中絶した日を“入り”とし、たとえば家族で卵を孕むものを必ず食卓に乗せて出産を連想させる儀式を行い、同居を始めた日を“明け”として、その家族イベントを終了させることを提案した。このように子どもの誕生日や重要な節目を祝うなど、夫婦・家族としての記念行事を行い、各個別面接では、記念日を年表化（家族誕生の歴史物語の記述）し、年代史をつくるよう助言した。これらは、不登校という問題行動で、不安定な事実婚状態の夫婦関係を安定させようとしているIPの変容を期待すると共に、CIの夫婦という人間関係に親としての自覚を促す目的を有している。

3) Ⅲ期：登校にまつわる葛藤（#26～30）20X1年8月～10月

理由は分からないが、家族の年代史をつくることに抵抗がある。次男が甘えたり、泣くことが増えた。それによって、しばらく止んでいた夫から子どもへの暴力がまた頻繁になった。夫は自分の思い通りに何でもしたい人。それがうまくいかないと怒る。表面には表さないが、内心では不愉快に思っており、その怒りを急に爆発させる。そういうところは私の父親と似ているかもしれない（#26）。

長女に対し、とくに感情的になってしまう。なぜか長女が泣いたり、笑ったりすると、涙や笑顔を武器にして私をコントロールしようとしているようで、戦いを挑まれているように感じる。気を引くために泣いている気がしてし

まって、長女が謝るまでとことん追い詰めてしまう。思えば、私も母親から「あなたは小さい頃から私と張り合っている」と言われたことがある。私もそんな感じなのだろうか。母親が否定し続け、私から取り上げてきた“女性らしさ”を前面に出している感じがするから長女の振るまいが嫌なのか、それとも「同性である娘くらいには私の気持ちを理解して欲しい」という期待があるからなのか。私が幼い頃、ピンクやフリルを母親に否定され、母親の期待に沿ったものを選んでいくことが思い出された。（#27）

早起きが苦手なIPが、私が声をかけると起きるようになった（注：登校刺激の一部）。IPは今も突然、かんしゃくを起こすことがあるが、その後、謝ったり、怒ったりしながら「なんで自分は怒っちゃうんだろう」と自問自答している。夫は、「IPがうまく起き上がらないときに怒りが出るので自分は起こさない」と言うので、私だけが声かけをしている。最近、夫は泥んこになって遊ぶ次女を見守る私の母親や、IPのフリースクールのお祭りで子どもの遊びに付き合っているおとなを見て「多くのおとなは子どもが手のかかることをしていても平気なんだ」「自分が子どもの時もあんなふうに遊んだ」などと呟くなど、たまに自分の子ども時代と関連付けた話をするようになった。相変わらず子どもが泣いたりすると怒るが、私が「また怒っている」と注意すると止むことも増えた（#28）。

私も、長女の話に付き合えるようになり、他の子どもたちがべたべたすることにも嫌な感じが薄れてきた。そうやってきた自分が嬉しい。とくに私の顔色をうかがう雰囲気が強かった長女が「猫は人間より早く死んじゃうんだよね」など、泣きながら話してくれるようになったのが嬉しい。私は子どもを産んだ時も、「肌の色は?」「指は何本?」など看護師目線で観察していて、情緒的に感じる事が少なかった。感情を口に出すのは恥ずかしいと思っていたのだと思う。しかし、第4子出産を目前に控え、「出産で家族と離れるのはさみしい」と口にした。夫からは「以前はそんなことを言わなかった」と指摘された。（#29～30）

Th.の印象：子どもの“子どもらしい振る舞い”にイライラすることが減り、母親との関わりを求める子どもに 대응ができるようになってきた。また、夫の言動の問題点を“問題点として”捉えはじめるようになり、今までは「そういうもの」と棚上げにしてきた夫の言動への疑問や、そのときにわき上がる感情を感じ始めている。

<家族面接の内容及び個別面接へのSVからの指導>

家族面接では「入籍しない＝パートタイム夫婦＝いつ別れるのか油断できない関係」であり、そうした関係では、

子どものかすがい(=つなぎ役)としての負担は大きいとSVが説明。同時に「夫婦関係の安定が子どもを楽にする」との方向性を示し、各個別面接においては、「夫婦がお互いに役割分担をしながら、共に子育てをしている」という感覚を持ち、お互いの感情にも注目ははじめた夫婦関係の変化を定着させるよう指示が出される。

4) IV期：CI.の子どもへの関わりの変化とIPの行動変化(#31～35) 20X1年11月～20X2年3月

1月前に第4子・次男(出産にともない、1月半ほど面接は中断)。IPは次男の面倒を見たり、何かと手伝ってくれる。先日は留守番を頼むと、搾乳した母乳を飲ませてくれていた。こんなことは初めて。困った行動は、寝ている次男の耳元で奇声を上げること。ただ、その様子を見てみると悪気はなく、次男が目を覚ましたら一緒に遊びたいと思っている様子。先日、学校に行く用事があり、行きたくなく渋っていたら、IPが「一緒に行ってやるよ」と、次男を抱っこひもで抱っこし、一緒に学校に行った。その後、大掃除や終業式のときは1人で登校した(#31)。

私の母親は駄目な部分を受け止められない人。褒めてもプレッシャーを与えてくる。たとえば、私が本を読んで泣いている時に、「人の気持ちがわかるのね」と言う母の褒め言葉の奥には、「そういう優しい人でなければならぬ」という雰囲気を感じる。こういう母親の態度が私の不登校の原因だったのかもしれない。学校に行けば100%できることばかりではなく、できないこともある。でも、母親がダメな部分を受け止めてくれないので「失敗できない」と思って、しんどかったのではないかな。その思いがあって学校に行けなかったような気がする。もしかしたら、今、IPも同じ気持ちなのかもしれない。私が「駄目なところがあっていい、失敗してもいいんだ」と思えて、そのメッセージをIPに伝えられれば登校できるようになるのではないかな(#32)。

年が変わったが、IPは引き続き登校している。授業について行けず、不安そうでもある(IP担当Th.より、「教科によってかなりのつまずきがあり、全く授業を理解していない。このままだと再び不登校になるかもしれない」との話聞いたCI.担当Th.が、どの程度、授業について担任に確認することを助言。後にCI.は担任と補習について話しあった)。補習は可能なようだが、具体的な話し合いをしていない。夫は「自分が勉強を見る」と言うが、実現できるのか。

SVに提案された、卵を孕んだものを食べるという家族の儀式は無事に終了できそう。年代史も少し書き始めた。

IPが社会科学で道を間違えて、担任が「何やってるんだ、バカヤロー」と叫んだらしい。IPは「信じられる? あんな先生の態度はおかしいよ」「そのままにしておく校長が変だ!」と怒っている。私もいらい、つい「もう学校に行かなくていい、少なくとも今の学校は行かなくていい」と言ってしまったが、IPは「友達ができたし…。そうは言っても」と、行きたそうなそぶりを見せた。

今までの私の子育ては、「こうすべき」とらわれ過ぎていた。しかし、初めて次男を「ただ無条件に可愛い」と思えるようになった。今までは、子どもに泣かれると「私の時間が奪われる」と感じたが、次男に対しては、そういう気持ちにならない。また、子どもに限らず、今までは相手が不機嫌になると思考停止になって、そのままにしていたが、最近は怒る夫に「ちょっと待って」と、考える時間をくれるよう伝えられるようになってきた(#33～34)。

年代史を書いていたら、夫から「自分(夫)を好きになったことが認められないのか」と責められた。夫は怒って雪の中に年代史を捨てた(後に夫が回収)。早く面接で振り返りができるように年代史を仕上げたい。年代史を書くことの難しさを感じている。これまで私たち夫婦はなにをしてきたのだろう。

IPがまた登校しぶりをはじめた。いじめと、担任の先生とのトラブルが原因。これまでの担任の対応にはIPも自分も失望しているので、話合いに行く気持ちにもなれない。ただ、IPは担任の勤めで学校のスクールカウンセラー(以下、SCと記述)と会い、一緒に将棋をして好感を持っている様子。私にはSCは学校側の人という思いがあり、信用しきれない部分がある。不登校だった自分の受けた教育相談で、相談員の対応に傷ついた体験が影響しているのだと思う。しかし、そうした体験、思いが私にあることをきちんとSCに話し、「だからIPを傷つける関わりはしないで欲しい」と釘を刺してからであれば、担任でなくSCを経由して学校とつながることを考えてもいい(#35)。

Th.の印象：自身の不登校について新たな発見をし、さらにIPの不登校とも結びつけて考えられるようになってきた。面接を通して自分とIPの問題を区別でき、「自分の気は進まなくとも、IPが学校に行きたいのであれば、なんとかしてあげたい」と、親の立場で動く意思も現れはじめた。その根底には、長年、回避し続けてきた母親との葛藤を見つめ直そうとし始めたことで、母親の受け売りではない“新たな公教育への視点”を模索しはじめたことがあると考えられる。また、“卵を孕んだものを食べる”という家族儀式を執り行い、年代史に取り組むことで、夫婦が家族という枠組みを意識し始めたせいか、夫婦仲は良くな

る傾向にある。

＜家族面接の内容及び個別面接へのSVからの指導＞

この時期からIPも家族面接に参加。SVがIPに「学校に行きたいと思っているのだろう。取り立てて登校できない理由が無いのであれば、不必要な不登校はしない方がいい」と伝える。同時に、CIと夫には「『子どもの自主性を尊重する』と言われても、子どもは『学校に行く、行かない』というようなことは決められない。こうした重要な判断を子どもに押しつけるのは、親役割を放棄していることであり、子どもにとって残酷なことである」と指摘した。各個別面接では、親が上手に子どもの背を押して挙げられるような援助と、現在の夫婦仲の良さをきちんと定着させるよう指示される。

V. 考察

1) 原家族—母娘問題

CIの説明によれば、夫婦は各原家族から強い影響を受けており、とくにCIが母から継承した文化（価値観/公教育否定）はIPにまで影響を及ぼしている。CIが夫や子どもに対して感情をともなう関わりができないのは、長年CIが、感情や思いを封印することで家族間のもめごとや葛藤を顕在化させないようにしてきたからである。もし、“今、ここ”でわき起こってくる感情を実感してしまうと、今まで封じ込めてきた両親（とくに母親）に対する怒りや、母親の唱える公教育否定への疑問、原家族内での葛藤、さらには日々の夫とのやりとりの中で感じているはずの感情も感じてしまうようになり、さまざまな問題と向き合う必要が生じてしまう。CIは、無意識にそれを避けようとし、子どもに対しても、「いつか可愛がればいい」と、感情が動かされるような交流のある親子関係の構築を棚上げしている可能性がある。このように情緒的な関わりを棚上げにし、感情を封印しておけば、正式な婚姻関係や、すべてを先延ばしにしていることから生じる罪悪感も、夫の暴力的な部分（夫が原家族から受け継いだ）への怒りや恐怖も感じずにすみ、家族の中にあるさまざまな問題を顕在化させずにすむのである。

たとえば、CIは面接中に「夫にどこを殴られたか覚えていない」と述べており、そのときの恐怖や怒りを抑圧している。しかし、こうした夫婦の狭間にいるIPは、家族内緊張の緩衝剤の役割を担っている。両親のいさかきを目にしたIPはCIに「赤ちゃんがいるのにお父さん殴ったね…」と声をかけ、CIが「私が悪かったから…」と答えるやりとりが幾度も繰り返される（Ⅱ期）。

本事例は、社会・経済的自立を果たした娘（CI）が、娘を引き留める母によって実家を離れて家を出ることの困難さ（結婚への戸惑い）を感じざるを得ない昨今の親子関係、とくに母娘関係の問題も含んでいることだろう（信田2008）。母は自らの存在意義を固辞するため、常に娘をコントロールし、娘は母を捨てて嫁ぐことができない。しかし、木附・青木・小川・斎藤（2011）は「すでに子をなしたCIは、IPの不登校などの問題行動を前に、もはや永遠に母の娘ではいることはできず、自らが母親として子どもを守る必要がある。CIは面接を通して、IPの問題が、実は自分自身の問題であると自覚していかざるを得ない」と指摘する。このCIの状態は「母親は娘を近くに置いておきたい欲望と、成人させたい欲望の両方を持ち、このアンビバレンスが娘に不安を感じさせ、娘には母親と同一化しながらも逃げ出したいという強い情緒的葛藤が存在する」（Chodorow 1978）に合致する。また、母親との近い関係は娘の自立を妨げ、共依存的なネガティブな面が存在する（北村 2008）。との指摘にも当てはまる。斎藤（1995, 2004, 2008）はこれを「母の支配」と呼んだが、CIはまさに母の支配という呪縛のなかにいたのだろう。

母娘の世代間伝達の調査を行った水元（2010）は、子どもを思い通りに育てたいという支配欲求、自我境界の曖昧さが母から娘に伝えられることを明らかにしているが、本事例でもCIは、「子どもを思い通りにしたい」（#15～19）と語り、同時に、長女への感情的な自分を振り返り、長女が自分をコントロールすべく泣く、笑うなどの感情を用い、戦いを挑まれているかのように感じている。そして、母親の「あなたは小さい頃から私と張り合っている」という言葉や、母親から否定され続けてきた女性らしさを回顧しつつ、一方で、娘に自分を理解して欲しいとも望んでいる（#27）。子どもを思い通りにするのは困難である、自らの感情に目を向けると母親と自分、自分と子（とくに娘）との自我境界の曖昧さに気付いてしまう。それを回避するために、重大な決定や情緒的な交流は封じ込められていたのではないだろうか。

2) 親としての自覚と事実婚

現在も継続中であるこのケースは、数々の秘められた思い葛藤や、なんとなく通り過ぎてきた日常生活の問題点が面接で明らかになり、意識化され、CIが変化し、その変化がIPにも影響を与えた。“業務”としての子育てではなく、子どもと感情豊かなやり取りができるようになったCIは、親としての心配からIPに朝起きるように声をかけ、学校の担任教師やSCとも積極的に関係を持ち始めた。若

本・山下・下舞(2009)は、不登校の児童生徒に会えるかどうかに関わらず、家族内の関係に焦点を当てることで、家族それぞれが具体的な対応を捉えやすく、家族全体の変化が感じられやすいとしているが、Cl.の面接を通じた家族関係の整理は、IPの不登校に対して有意義であったと考えられる。

Cl.は先日、第四子(次男)を出産したが、IPはこの子を可愛がり、積極的に子育ての手伝いをしているという。小学校の訪問にCl.が躊躇していると、次男を抱きかかえ誇らしげにCl.に同行している。このような行動はかつてIPに見られず、むしろ妹弟に対して攻撃的でもあった。Cl.を中心とした登校刺激と、この学校訪問を機に、IPは少しずつ登校するようになった。登校だけでなく家庭生活の面でも行動変容が生じている。母親の情緒的な振る舞いが、子どもにも影響を与えたのだろう。

家族力動の観点から見れば、子どもの問題行動は、家族の問題を象徴するものとされる。IPの不登校は、世代間伝承の問題だけでなく、事実婚という不安定な夫婦のかすがいと機能し、さらにはCl.家族とその実家をつなぎ止める役割も担っている。五十嵐・萩原(2004)は、「在宅を希望する不登校」(本事例では、IPは愛着対象でもある祖母の家で過ごすことが多いが)では、母への「安心・依存」「不信・拒否」、父母への「分離不安」との高い相関にあることから「親を困らせることと、親への否定的な愛着表情が結びついていること、さらにはその背景に安心感を伴う愛着関係の確立についての欲求にあることが推測できる」としている。本事例は、Cl.のみならず、夫もまた、妹弟すべてが不登校であり、夫婦共に親への愛着の問題を抱えつつ、解決に至らないまま、自らが親になっている点にも注目すべきなのかもしれない。

今後、さらにCl.が、長年、封印してきた自らの感情への洞察を深めることで、原家族間の問題、とくに実母との葛藤と向き合えるようになるだろう。後に、実母との精神的別離が進み、実母がCl.に行ってきた「こうすべき」に縛られた子育てとは違う情緒的な関わりを持つことが増えれば、“子どもの自主性を重んじる”名目で逃れ続けて来た親の責任の遂行も可能になり、それができないことの裏返しとして「何でも禁止」として、子どもをコントロールしようとする傾向も弱まっていく。それはさらに、子どもたちとの情緒的な交流を盛んにしていくはずである。しかし、一方で棚上げしてきた夫との問題、夫自身が抱える問題が顕在化し、夫婦は新たな危機に直面化し、その夫婦の混乱(安心できない夫婦の関係)が再び不登校などの問題行動を子どもにもたらす可能性が懸念される。

VI. 結語

本事例では、家族年代史の作成がCl.のみならず家族の変容に大きな役割を果たしている。“未入籍のまま、夫婦がそれぞれ異なる名字を持つ”ことは、社会的に容認された夫婦であるとはいいがたく、いわばいつでも別れられる不安定な関係でもある。家族の年代史作成により夫婦の歴史を振り返り、様々なイベントを妻・夫がどう認識しているかを語ることは、ナラティブという視点からも効果的であった。また、この作業は、何をどう語るのか、その考えはどこからくるのかに思いを巡らせることになり、ひいては、原家族との問題に直面させることになった。

自分のストーリーを語ることは、体験を語りなおすことであり、現在という紙の上に歴史を書き上げることであり、語り直しとはセラピストが知らなかったことに反応して、語り手が記述し直し、説明しなおすことである。両者は影響しあいながら共に進化するが、経験とその記述もまた同時に進化を遂げる、語り直しと言っても、それは単に、セラピストがそれまでに見聞きしたことを語ることではない。セラピストは、以前あったのと同じの業者やストーリーを浮かび上がらせるのではなく、「いまだ語られていない」鉱脈を探るのである。人の記憶には想像性が秘められている。新しい物語作品と新しい歴史がそこから作り出される(McNamee & Gergen 1992)。

本事例でも、年代史の作成が語られていないCl.の母娘の問題を明らかにし、それらが婚姻関係にまで影響を与えていることが示された。Cl.は年代史作成に困難さを感じていたが、これは問題の顕在化を恐れたためでもあろう。さらには、この作業を通してCl.は育児や結婚についての自分の姿を振り返ることになる。このプロセスを経て、初めて情緒的な交流のない子どもとの関わりを認識するのである。

不安定な婚姻において、IPはそれを安定化する役割を担っている。安定に必要なのは不登校という問題行動であり、IPの問題行動が自身に由来することを知ること、感じることで、IPの問題は消失しつつある。本事例はいまだ継続している事例であり、後にCl. IPがどのような変容を遂げるかは、次いで報告したいと考える。

引用文献

- 1) Chodorow, N. 1978 The reproduction of mothering. University of California Press (大塚光子, 大内管子訳, 母親業の再生産, 1981, 新曜社)

- 2) 北村琴美, 2008, 過去および現在の母娘関係と成人女性の心理的適応性—愛着感情と抑うつ傾向, 自尊感情との関連, 心理学研究 79, 116-124
- 3) 木附千晶, 青木智子, 小川未佳, 田中淳一, 斎藤 学, 2011, 母の語られない思いが子どもの行動として表れたケース, Family Child Therapy, NO.5, 24-30
- 4) 信田さよ子, 2008, 母が重くてたまらない 墓守娘の嘆き, 春秋社
- 5) Mcnamee. S. & Gergen K.J, 1992, Therapy as Social Construction. Sage Publications Ltd (野口裕二, 野村直樹訳, ナラティブ・セラピー, 社会構成主義の実践, 金剛出版)
- 6) 水元深喜, 2010, 青年期から成人期の移行期における母娘関係の世代間変化と世代間伝達, 家族心理学研究, 24-2, p89-102
- 7) 五十嵐哲也・萩原久子, 2004, 中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連, 教育心理学研究, 52, 264-276
- 8) 斎藤 学, 1995, 「家族」という名の孤独, 講談社
- 9) 斎藤 学, 2004, インナーマザー—あなたを責めつづける心の中の「お母さん」—, 講談社
- 10) 若本純子・山下みどり・下舞久恵, 2009, 国内におけ

る不登校研究の概観 — 1990-2007年の雑誌論文・記事に見られる研究動向の検討と不登校児者を取りまく教師・家族に焦点をあてた概観, 鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科紀要 4, 3-17.

- 11) 渡辺久子, 2005, 母子臨床と世代間伝達, 金剛出版

参考文献

- 1) クロエ・マダネス著, 竹前ルリ・穂積由利子訳, 1966 変化への戦略—暴力から愛へ, 誠信書房
- 2) ジョナサン・H・ピンカス, 田口俊樹訳, 2002, 脳が殺す—連続殺人犯:前頭葉の“秘密” 光文社
- 3) J・スウィガート, 斎藤学監訳, 1995, バッド・マザーの神話, 誠信書房
- 4) マーチン・H・タイチャー, 友田明美訳, 2006, いやされない傷—児童虐待と傷ついていく脳, 診断と治療社
- 5) ロビン・カー=モース, メレディス・S・ワイリー, 朝野富三, 庄司修也訳, 2000, 育児質からの亡霊, 毎日新聞社
- 6) 斎藤 学, 2008, 「家族神話」があなたをしぼる～元気になるための家族療法, 日本放送出版協会

The Child's School Refusal is a Sign of the Family Problem

Chiaki Kizuki¹, Tomoko Aoki², Mika Ogawa³, Satoru Saito³

¹Department of Occupational Therapy, Faculty of Health Science Technology,
Bunkyo Gakuin University

²Department of Public Health College of Natural Sciences Keimyung University

³IFF CIAP Counseling Center

Abstract

This case study concerns a mother unconscious of her problems and the negative behavior of her child, which might be reflecting these problems. Main problems are the husband being violent against the child's refusal in going to school. The aim of the therapy was to make the parents of their respective families. In order to achieve this goal, the events during their married life together, like the child's birth etc., were examined and revalued. By doing this, she came to understand her roles as a parent and started to realize that "problems with the school and relationship are because of her own mother's influence and thought of public education and her own childhood experience. It also becomes clear during the therapy process that the child's behavior was linked to her problems. When she recognizes her own belief, finally the child's school problems are expected to cease to exist. In this paper, we will try to analyze 1) case process, 2) how to change Cl.

Key words —— Mother-daughter relationship, Independent, Violent, Refusal school

Bunkyo Journal of Health Science Technology vol.4: 19-28